

抵抗としてのイメージ

——ヤン・シュヴァンクマイエル映画における「生きた物体」

河上 春香

ここに掲載するのは、2010年度表現文化コース優秀卒論に選ばれた河上春香さんの卒業論文の縮約版である。河上さんの卒業論文は、チェコの映画監督ヤン・シュヴァンクマイエルの映画における「生きた物体」のイメージが、作品世界の中でどのような意味をもつのか、そして、観客に対してどのような働きかけを行いうるのかを考察したものである。シュヴァンクマイエルは、特に日本では「チェコアニメ」や「アート・アニメーション」という分野で取り上げられることが多いが、河上さんはシュヴァンクマイエルを単にアニメーション作家としてではなく、シュルレアリスムをその思想の基盤とする表現者として捉えている。従って論文では、まず、シュヴァンクマイエルの物体観をシュルレアリスム思想の文脈において確認することから始め、その上で具体的映画作品における「生きた物体」の分析を行っている。その際、河上さんは物体と人間の「人形化」という点に注目して論を展開している。シュヴァンクマイエルの映画においては、アニメーションによって物体が「疑似 - 主体性」を獲得して「人形化」するだけでなく、それと並行して人間が主体性を棄却して「人形化」し、「肉のパペット」になる。そしてこの「人形化された物体と人間」のイメージは、全てを人形のように操る「不正操作」の存在を暴露し、告発するものであると論じている。河上さんはこうした考察を、抽象的議論に終始するのではなく、『ワイズマンとのピクニック』、『ルナシー』、『ファウスト』の三作品を題材にして、具体的に、説得力をもって論じることに成功した。ただ、ここに掲載された短縮版では、紙面の制限から作品分析を詳しく展開することができなかったことが惜まれる。(高島葉子)

論文構成

序論

第1章 シュルレアリスムのオブジェとシュヴァンクマイエルの物体

第2章 作品分析

第3章 シュヴァンクマイエルのイメージの性質

結論

はじめに

本論文では、チェコの映像作家ヤン・シュヴァンクマイエル (Jan Svankmajer 1934-) の映画にたびたび登場する「生きた物体」＝「ストップモーション・アニメーションによって動き回る、本来は生命を持たないもの」のイメージを取り扱う。

シュヴァンクマイエルの作品の主題は比較的一貫しており、幼少期の恐怖、触覚への関心、食事にまつわる強迫観念といった共通のモチーフが繰り返しあらわれる他、映像づくりの面でも、短いカット割りや極端なクローズアップなどを多用した独特のスタイルが確立されている。中でもストップモーションによって、椅子や机といった日用品から骨や生肉などの有機物までが、独自の生命を持つかのように動くという表現は頻繁に用いられる。また、特に日本では、シュヴァンクマイエルの名前は所謂「チェコアニメ」や「アート・アニメーション」といった単語と共に、アニメーション作家として取り上げられることが非常に多い。このことから、「生きた物体」はシュヴァンクマイエルにとって重要なモチーフであると同時に、対外的にも彼の作品を代表するイメージとなっているといえよう。

では、この「生きた物体」のイメージは、シュヴァンクマイエルの作品世界の中ではどのような存在として位置づけられるのだろうか。また、観客に対して、このイメージはどのような働きかけを行いうるのか。この二つの問いを軸として、本論文ではまず、シュルレアリスム運動における物体＝オブジェのあり方の検討から出発し、次いでシュヴァンクマイエル自

身の発言といくつかの作品を具体的に分析していくことによって、彼の思想のなかでの「生きた物体」イメージの位置づけを明確にする。その後、彼のイメージが観客とどのような関係をとって結ぶのか、ということまで検討を進めていきたい。

1. シュルレアリスムにおける物体観

シュルレアリスムは、既存の理性や秩序を否定し、正常と異常 / 善と悪 / 真と偽といったあらゆる分割の身振りを拒否し、各人の〈欲望〉に裏打ちされた想像的なもの、非合理的なものが中心に据えられた新たな価値体系を立ち上げることを目論む。「一連の社会的実践や詩的実践の中では周辺に追いやられ、また括弧に入れられてきた、あらゆる行為や実践を可能なものとして再び流通させ、それに正当なステイタスを与えなおすこと」¹を目指す思想である。

物体＝オブジェというモチーフは、特に美術の領域において、1930年代頃から関心が払われてきた。パリでは「シュルレアリスムのオブジェ (objet surréaliste)」の製作が活発になってゆき、その代表的なものにはジャコメッティの「象徴的機能を持つオブジェ」や、アンドレ・ブルトンの製作した「ポエム・オブジェ」などがある。ここでは、所謂「客観的偶然」のテーマが前面に押し出されている。ブルトンを中心としたシュルレアリスムのテキストの中にあられるこの概念は、J・C・ジャンドロンによって以下のように定義されている。「人間の欲望、また時に人間の恐れ——との (例外的な) 符合の場合に、偶然は客観的 (オブジェクティブ) と言い得る。つまり、その場合、当該の人間の (欲望する) 主観性が、ひとつの客体 (objet) に投影されるかのごとくすべてが進行する。」²すなわち客観的偶然とは、ある人間の内的・主観的な心の動きが、何らかの外的・客観的な事物と直接的な繋がりを持っている (かのようにしか思えない) 状況のことであるといえる。

このように、シュルレアリストにとって物体の存在とは、自らの内的感覚が投影されたもの、主体と客体が繋がりあう場であった。

2. シュヴァンクマイエルの物体観

一方、物体のアニメーションを製作するヤン・シュヴァンクマイエルは、しばしば「物体の記憶」や「物体の内的な生命」について言及する。

シュヴァンクマイエルにとって、自らが作品で取り上げる使い古された物体たちは、長い時間の流れのなかで人間に触れられ、人間の営みに関わることによって、様々な記憶や感情を蓄積してきた存在である。ここでは「人間の内的感覚の客体化されたもの」という、1930年代のシュルレアリストたちの物体観を根底に保持しつつも、より積極的な主体性へと繋がっていき、「生命」という要素が見出されている。すなわち、シュヴァンクマイエルのアニメーションは、多くのパペット・アニメーションについて一般的に言われているような、「物体に生命を与える」営みとは異なる。むしろ、「客観的偶然」的契機によって物体に宿った「生命」を、眼に見える形に引き出す営みである。シュヴァンクマイエルによって、物体たちは、自ら「語る」主体性を手に入れるのである。

3. 映像作品分析

ここからは、アニメーション化された物体の主体性のありようについて、シュヴァンクマイエルの具体的な作品を取り上げて考察を行う。

まず、1969年の短編作品『ワイズマンとのピクニック』であるが、この作品では物体と人間の立場が反転している。椅子や机、ちりとりなどといった日用品が、アニメーションによって自由に動き回り、遊び、あるいは作業をする。逆に人間は、手足を拘束され、口をふさがれ、あらゆる自由を奪われた状態で、物体のように無造作に扱われる。

この作品に登場する物体たちは、本来は人間によって使用されることにその存在意義がみとめられる類の「道具」である。ゆえに、この作品で描かれた人間と物体の反転は、ただちに主体と客体の反転につながる。使役される側の客体＝オブジェ＝物体がアニメーションによって独自の主体性を獲得したとき、人間は反対に客体的存在へと転落するのである。

しかし、このようにして人間の主体性を圧倒する物体の主体性は、決し

て安定して在り続けられるものではない。むしろ、それが疑似的なものに過ぎないということを映像のなかで自ら暴露することがある。

D・ゾーフアは、シュヴァンクマイエルの2001年の長編『ルナシー』について論じた文章の中で、彼の映像の「反イリュージョン性」を指摘している。³すなわち、アニメーション化された物体の動きのぎこちなさや、端々に見られるカメラワークのわざとらしさによって、シュヴァンクマイエルの映画はしばしば、それ自身が映画に過ぎないのだということを見せつけるといふ。そのようなイメージにおいては、「生きた物体」に見出される主体性は、もはや真実なものではありえなくなる。

『ルナシー』においては、肉塊や動物の内臓・眼球などがこうした疑似-主体性を与えられ、映画の中で動き回る。そのシークエンスは、人間の俳優によって展開される映画の本筋と対応する形で物語の合間に挿入される。疑似的な主体でしかないアニメーション化された肉塊と、生きた人間の動きがこのように並置される。ここでは両者が同じ地平の、ともに「何者かによってまるで生きているかのように操られるもの」、疑似-主体的なものとして、あらわれてくることになる。

そして、このような存在はつまるどころ、「人形」というモチーフに帰結する。「人形」はシュヴァンクマイエルの映画において中心的な役割を担うモチーフで、彼自身「人形は私の精神構造のなかにしっかり組み込まれているので、まわりの世界とかかわるときに抛り所となる何かに立ち返るように、創作活動においてはいつも人形に立ち返っている。」⁴と語っている。彼は初期の長編『ファウスト』で、人形劇に巻き込まれてしまう男を描いており、ここでは「人形化する人間」を通じて、彼の人間の主体性への根源的不信がはっきりとあらわれている。

4. シュヴァンクマイエルのイメージの性質——人形、物体、人間

物体に疑似-主体性を与えるアニメーションという契機は、すなわち物体を人形化する契機であると捉える事が出来る。

物体は人間になぞらえられることで、人形として「動かされる」。ちょ

うど人形が、劇の舞台の内部に限っては、主体として物語を展開することが出来るように、それまでは人間によって使役される客体でしかなかった物体は、人形化によって、不安定な / 疑似的なものであるにせよ、たしかに主体性を得るのである。逆に、本来は物体を使役する側、安定的に主体であり続けるものだった人間は、物体が主体性を得るにつれて、また人間自身が物体になぞらえられることによって、今度はその主体性を限りなく不安定なものにさせられてゆく。人間を物体になぞらえるとは即ち、人形化するということに他ならない。

物体と人間、双方の人形化の操作によって、人間の主体性は棄却される。そこに立ちあがってくるのは、「不正操作」を被る客体としての人間である。「不正操作」はシュヴァンクマイエルの人間観の根底にあるものであり、彼が抵抗を続けなければならないと考えている概念である。人間はつねにさまざまな類の抑圧に囚われ、抑圧によって動かされている存在であるというアイデアであり、シュヴァンクマイエルは人間のそのような状況を、彼の「人形化された物体と人間」のイメージによって、絶えず提示し続ける。

自らが主体的存在であることを信じて疑わない人間たちや、彼らによって運営される社会においては、「不正操作」は隠蔽された形で存在し続けることになるのだが、シュヴァンクマイエルの主体不在のイメージは、そのような場に対して「不正操作」の存在を暴露し、注意を惹きつけて止まない。この告発は、彼の目指す「不正操作への反抗」のひとつの形といえるだろう。

5. 観客とイメージの交流

シュヴァンクマイエルの「生きた物体」イメージは、しかし決して一方的な告発に終始するわけではない。

言語によって「正しい読み方」を規定されず、ただ肉体的感覚を通じて提示される彼のイメージ群は、観客のあらゆる反応を許容する。このとき、観客はもはや、あらかじめ言語によって確定された意味を受動的に読み取り続ける存在ではなくなる。自らにアプローチしてくる多義的なイメージ

群に対し、どのような態度を取るか、どのような応答をするかという選択権は常に観客の側に委ねられている。そして、イメージと観客との間にこのような交流の場が成立する時、イメージ自体のレベルでは徹底的に棄却されていた「主体」が、イメージに対する応答を為すものとして、観客の側に回復してくるといえる。このようなことを可能にするシュヴァンクマイエルのイメージの働きもまた、「不正操作」へのひとつの抵抗となっていると考えられる。

注

- 1 J.C= ジャンドロロン著、星埜守之 / 鈴木雅雄訳『シュルレアリスム』（京都、人文書院、1997年）5頁。
- 2 同書、137頁。
- 3 David Sorfa, The Object of Film in Jan Svankmajer (*Kino Kultura* Special Issue#4, 2006), p.6.
- 4 J. シュヴァンクマイエル著、赤塚若樹編訳『シュヴァンクマイエルの世界』（東京、国書刊行会、1999年）、43頁。

参考文献

《雑誌論文》

- Solarik, Bruno. 'Palpable Phantoms', *Phosphor* No.2, Leeds : 2009. (pp. 4-8)
- Sorfa, David. 'The Object of Film in Jan Svankmajer', *Kino Kultura* Special Issue#4, 2006, <http://www.kinokultura.com/specials/4/sorfa.pdf> (accessed January 13, 2011)
- Bydzovska, Lenka. 'Against The Current. The Story of the Surrealist Group of Czechoslovakia', *Papers of Surrealism* Issue 3, 2005 http://www.surrealismcentre.ac.uk/papersofsurrealism/journal3/acrobat_files/lenka.pdf (accessed January 13, 2011)

《書籍》

- 赤塚若樹『シュヴァンクマイエルとチェコ・アート』 東京、未知谷、2008年。
- 小野耕世『世界のアニメーション作家たち』 京都、人文書院、2006年。

J.C= ジャンドロロン著、星埜守之 / 鈴木雅雄訳『シュルレアリスム』 京都、人文書院、1997年。

J. シュヴァンクマイエル著、赤塚若樹編訳『シュヴァンクマイエルの世界』 東京、国書刊行会、1999年。

P. ワルドベルグ著、巖谷國士訳『シュルレアリスム』 東京、河出文庫、1998年。

R. バルト著、蓮實重彦 / 杉本紀子訳『映像の修辞学』 東京、ちくま学芸文庫、2005。

Richardson, Michael. *Surrealism and Cinema*. New York : BERG, 2006

《映像資料》

ヤン・シュヴァンクマイエル監督 / 脚本「ワイズマンとのピクニック」、1969年。『ヤン・シュヴァンクマイエル 短編集』DVD、コロムビアミュージックエンタテインメント、2005年。

ヤン・シュヴァンクマイエル監督『ファウスト』ペトル・ツェペク主演、1994年、DVD、コロムビアミュージックエンタテインメント、2005年。

ヤン・シュヴァンクマイエル監督『ルナシー』パヴェル・リシュカ、ヤン・トジースカ主演、2005年、DVD、コロムビアミュージックエンタテインメント、2007年。